

<作品評>

審査員 小松健一

大賞 「禊」

樋口 良夫（愛媛県）

今年度の大賞作品は、高知県南西部、幡多郡大月町古満目に三百六十余年前から伝わる「水浴びせ」の伝統行事をモチーフにしたもの。

毎年一月二日の寒中におこなわれるこの行事は寛文二年江戸前期の頃、この地方は大火に見舞れた。以来、その年の防火を祈願して始まったと言われている。町の若衆たちが海水を浴びせられながら町内の神社などを巡るたった一日しかない行事だ。

作者はそれを見事に三点の写真に凝縮させて表現している。それぞれのカットが的確であり、ストーリー性がある。モノクロームでのプリントも成功している。技術的な上手さを含めて総合力では他作品より頭一つ抜き出していた。充分に大賞作品に値する作品である。

しかし、あえて言えばメッセージ性、独創性、革進性がほしかった。

推薦 「爛爛」

下吹越 直紀（東京都）

久しぶりにすばらしい肖像写真と出会えた。作者は23歳。鋭い眼光、潮に叩かれて焼けた肌、口からアゴを被う剛毛。一目で北の漁師とわかる。凧いだ海に朝日があたり（夕日かも知れないが）、若い漁師の顔の陰翳を刻印して印象深い作品になっている。髪の毛の揺らぎから潮風も感じさせてくれる。何も言うことはないが、右のロープか、木材が少しうるさかった。僕の勝手な想像だが、撮影地は北海道とあるので「アイヌの漁師」などのタイトルを付ければインパクトがあった。

推薦 「花咲く頃」

加藤 和弘（三重県）

海岸の堤防の砂地に咲く浜大根と野良猫を撮ったと言う。この作品は、その撮り方、表現方法が奇抜だ。ユーモラスと独創性が、数ある猫をモチーフにした応募作品の中で群を抜いていたのである。一本の白砂の道の両側に浜大根が咲き乱れている。そこに突然と猫の手が天に向かって伸びている。まるで「唯我独尊」と言わんばかりに。僕はこの作品を見ていてつくづく「平和」の尊さを思った。写真は平和でなければ撮れない！！作者も同じ思いを感じながら撮ったのかも知れない。

特選 「昆布の湯通」

有田 勉（岩手県）

三陸海岸の主要漁港である岩手県宮古市での撮影。宮古は東日本大震災で大きな被害を受けた街だ。その漁港での朝の作業の一コマを撮している。カメラアングル、ディスタンス、シャッターチャンスとも的確である。昆布の湯通作業に、迫まっているので湯気や朝の光などが写りこんでいる。昆布の間に向こうで作業する人を入れ込み遠近感を出した。何よりもクレーンを使って大量の昆布を操る女性を凛凛しく捉えていることが良かった。それにしても81歳とは思えない作者のフットワークに拍手を送りたい。

特選 「白い朝」

日野 昭雄（北海道）

サハリンやシベリアから越冬のために毎年知床半島にある羅臼町にオオワシやオジロワシがやってくる。国の天然記念物に指定されており、翼を広げれば全長2メートル以上になる。流氷に被われる二～三月の時期でもこの地域ではエサが豊富なことがオオワシたちにとっての楽園の地なのだろう。この作品の良さは流氷に佇む十数羽のオオワシたちを、大漁を願い見送るかのように配置し、背後にタラ漁に出航する漁船を取り入れたことだ。

厳冬の流氷期にも漁を続ける羅臼の漁師たちがワシたちの越冬をサポートしていることを捉えているのである。

特選 「厳冬に咲き誇る」

根岸 泰幸（福井県）

ドラマチックな気象条件の中、ものにした風景写真として印象に残った。撮影場所は、よく知られている福井県越前町。「越前水仙」の群生地が広がり呼島間を望む梨子ヶ平台地からであろう。

様々なコンテストなどでこの場所で撮った写真を見るが、僕はこの作品が一等だと思う。冬の荒れた日本海、波頭からの飛沫が半島を襲う。暗雲が垂れこめる空から一条の光が水仙の群生を点した瞬間、シャッターを切った。フォトジェニックな作品である。

特選 「航海の安全を願って」

吉永 朋子（奈良県）

淡路島には造船所が大小あわせてたくさんある。“造船の島”と呼んでもいいくらいだ。その淡路島へ奈良から二度足を運んでもものにしたのがこの作品。作者は七四歳。熱意とパワーにまず敬意を表したい。何んでもそうであるが努力の積み重ね以外に佳作は生れることはない。年配の職人と若い職人が船の修理点検をしている。高速艇なのだろうか、船底の形が面白い。そこにポツリと職人が休んでいる。こうした光景を見ると決して大きくはない造船場であることが想像できて愛着が湧く作品となっている。

優秀賞 「ピンと張って」 **山本 健太郎（愛媛県）**

新造船を初めて水に触れさせ、船の命名がおこなわれる儀式である進水式。この写真の応募は毎年非常に多い。華やかで絵になる場面が多いからであろう。しかし、この作品は儀式を前に黙々と裏方の作業をする労働者にスポットを当てている。進水へ出航する合図となるシャンパンを船体にぶつける支綱というロープを切断するための調整作業をおこなっているのだ。

僕も三十年間、マリナーズ・アイ展を見てきたが、この場面を切り取った写真は初めてであった。

優秀賞 「収穫」 **入交 貞悦（高知県）**

小さな港へ海藻だろうか、船底一杯にして夫婦が戻ってきた。力を合せて荷揚げしている瞬間を切り取っている。海の恵みに感謝するとともに、夫婦で元気に働けることへの喜びが二人の表情や仕草から滲み出ていて微笑ましい。偶然だとは思いますが、対岸にはこれまた夫婦と思われる猫がのんびり散歩している。実は本作品の味噌はこのコントラストにある。

優秀賞 「おだやかな日々」 **山根 淳市（大阪府）**

静かな時が流れている写真ではある。撮影地は石川県七尾市。能登半島の中央部に位置する場所だ。僕が不思議に思ったのは、作者は大阪・堺市の人である。何か用があって行ったのか、撮影に出かけたのかはわからないが普通、生産者のカキ小屋の中に入って、日常生活をここまでは撮れるものではない。特に二点目の七尾南湾と能登半島を望める窓がある小屋で黙々とカキ剥きの作業をする小母さんの写真が良い。能登の風土を捉えている。

優秀賞 「海女デビュー」 **桑原 達夫（滋賀県）**

世界でも非常に貴重な「海女文化」が継承されている三重県鳥羽市菅島での撮影。700年程前の島の伝承を現在も守り続けて、毎年7月上旬におこなわれている「しろんご祭り」での一場面。

わずか人口は500人にも満たない島ではあるが海女の数は多い。この作品はそんな海女を目指す島の少女たちの初御披露目の舞台である。生憎雨模様の天気だが、肩や背中から少女たちの緊張感が伝わってくる。将来、海女として島で暮らしていくのだろうか……。沖の小舟には彼女らを見守るかのように島の漁師たちが立っている。

優秀賞 「しらうお漁」

楠 友広（愛媛県）

宇和島市津島町を流れる岩松川で、春を告げる魚「しらうお」の伝統的な漁がおこなわれる。この魚、地元では「しらうお(白魚)」と呼んでいるが、実は「シロウオ(素魚)」が正しい。双方名前は似ているが、まったく異なる魚である。早春に岩松川へ産卵のため遡上してくるシロウオは、ハゼ科の魚で体長4センチ、全身が透き通っている。踊り食いも名物で、のどごしを楽しめる唯一の魚として珍重されている。その早春の風物詩である漁のはずなのに四国にはめずらしい大雪。79歳になる作者も漁師と一緒に川に入りシャッターを切りまくったのである。その熱意、感動は十分に伝わってくる。残念なのは被写体とカメラの距離感がみな同じだったことだ。例えば一点目はアップ、二点はロングで撮っていればさらに上位に行けた作品であった。

優秀賞 「幸せの光」

高見祐子（沖縄県）

常滑市にある人口浜のりんくうビーチで撮ったもの。対岸には中部国際空港が広がっている。この作品のテーマはタイトルそのものである。作者が語る「もうすぐ産まれる、希望あふれる子供の未来への光。笑顔と幸せあふれる今という光。」が、この作品に表現されているのだ。写真そのものは、特に目新しいものでも、テクニカルなものでもない。いわゆる普通のスナップショットだ。であるが、先に書いた作者の思いが見る側にも伝わってきて幸せな気分させてくれる……。もしかしてこのモデルは、作者自身かも知れない。

優秀賞「りんご飴」

磯秀樹（和歌山県）

祭の夜店で、いつも欲しいと母にねだった僕だが、とうとう古稀になった今までも食べたことのない「りんご飴」。甘酸っぱい思い出が甦ってくる作品である。撮影地は大阪の阪南市。和歌山県と県境を接している街だ。写真は写っている少女たちが着ている半被に「大西町」と記されていることから波太神社に奉納する「大西町やぐら」が曳行される祭り日に撮ったものだろう。海老野の浜で海入りするのがクライマックスだが、あえてそこ外して、お祖母さんが孫の少女たちにりんご飴を買ってあげて、浜に遊びに来たところを狙ったのが成功した要因である。

優秀賞「縄張り」

榎本隆志（和歌山県）

単純明快で楽しい作品である。冬の斜陽を浴びてこの漁港を仕切る野良猫軍団の見廻りである。先方は喧嘩早い若々しい猫、真ん中には風格のある御大将、そして殿備えは激闘を何度とくぐりぬけてきたベテラン。そんなことがすぐに思いつくユーモラスな写真である。それにしても作者はこの野良猫達と同士なのか。これだけ迫って撮影をしても許してもらえとは、相当深い中なのかも……。

U19大賞「彼女」

今野 珠乃（東京都）

今回から新たに設けられた「U19大賞」は、十代の応募作品の中から一等すぐれた作品を選び、十代に大いにマリナーズ・アイ展へ参加し、成長をはかってもらうことを目的としたものである。初めての試みだったが、応募者は82人、応募作品数は146点であった。その中から初受賞したのが「彼女」である。三浦海岸での撮影だが、うっすらと海霧のかかった朝の浜辺に佇むセーラー服の女子が印象的だ。一見何気ない写真に見えるが、砂浜での立ち位置、水平線と視線の重なり、ライティングも美しい。

会長賞 「天を仰ぐ」

加賀谷 航太（神奈川県）

撮影地は、香川県観音寺市にある高屋神社本宮。標高404メートルの稲積山の山頂に鎮座している。最近、撮影スポットとして、人気を呼んでいるらしいが、正に「天空の鳥居」にふさわしい。作者は23歳の船乗りだが「持っている人」なのだろう。台風接近の何も見えない風雨の中、参拝を済ませ下山しようとする、にわかに雨が弱まり、天空が明るくなり、眼前に雄大な瀬戸内海が広がったと言う。鳥居の真ん中で天を仰ぎ、地上を見下ろしている女性は、作者にとって真の女神なのかも知れない。

特別賞 「朝焼け？夕焼け？」 漆田 久（神奈川県）

和歌山県日高郡由良町での撮影。和歌山県の中央部に位置する小さな町に、なんで巨大タンカーが停泊しているのだろうかと思いに思った。調べてみると由良というこの町にはエム・イー・エスのドッグをはじめ大きな船造所があることがわかり納得した。前は太平洋だから朝日を浴びたタンカーだろう。それにしてもどう言う状態でこの写真を撮ったのか。大胆な構図がこの作品の決め手だった。